

宗教倫理学会第19回学術大会  
公開講演  
2018年10月6日(土)  
於 京都外国語大学・一号館 R171

講 師

佐々木 閑 (花園大学 教授)

演 題

仏教の修行者はなにを目指すのか

## 仏教の修行者はなにを目指すのか

佐々木 閑（花園大学教授）

本日はテーマを大きく八つの項目として配布資料に挙げておりますが、特に仏教の世界観、倫理観がどのような構造でできているかをお伝えしたいと思います。日本の仏教は大乗仏教ですので、お釈迦さまがつくった仏教とは、かなり変容しております。日本の仏教だけを見て、そこから倫理観を抽出しようとしても一方的な狭い、釈迦と違う世界観が出てきてしまいますので、それでは不十分であります。そこでまず、古代インドの釈迦の後継者たちがつくった宗教倫理の中での仏教を見ていく必要があると思っています。

どのような世界観で仏教が成り立っているか。元になりますのは四法印すなわち「諸行無常」「諸法無我」「涅槃寂靜」「一切皆苦」の四種の認識です。その中で最も基本となるのは「一切皆苦」の世界観です。「一切皆苦」は、すべてが苦しみの上に成り立っているということであり、苦しみのベースは生きていること、生存していることが＝苦しみであるという「一切皆苦」という考え方です。生存は＝生老病死、この四つが必ずベースにありますので、生きること＝生老病死を体験していくことであると。それはどれ一つとっても安楽なものではない。すべては苦しみの元でありますから、したがって生きることは苦しみであるということになります。この当時のインドの世界は、「輪廻」をベースとした世界観でありますから、「一切皆苦」は終わらない。「輪廻」は生きかわり、死にかわりを永遠に繰り返す現象でありますから、そのうちの一つの「生」が苦であれば2番目も3番目も「苦」であるということで、無限の過去から無限の未来まで我々は苦しみの中で生き続けるというのが「一切皆苦」の考え方であります。

大事なのはこの中に「救済者はいない」ということです。外部に頼って救済を求めて、それによって「一切皆苦」からの離脱を望むことは不可能なのだ。なぜか。外にはそういう者はいないからです。仏教以前の宗教、バラモン教においてはバラモン教の最高神であるブラフマン、梵天が最高神の立場として世界を司る神とされていましたが、仏教はそれを否定しました。「バラモン教の世界観は錯誤である」といったわけで、したがって、それまでの人たちが頼りにしていた梵天は我々の救済には一切役に立たないという立場に立ちました。これをよく表すのは「梵天勧請」というものであります。お釈迦さまが悟りを開いた時、お釈迦さまはそのまま楽に死んでいこうと思った。悟った内容を人々に説き示そうなどは全く考えず「私はもう悟りを開いた

ので輪廻をしなくなったのであるから、悟りの喜びを感じながら寿命がくるまで生きて、そこで死ぬ」と考えた。輪廻しなくなった人間が死ぬば、それは完全消滅の道であるから最も安楽な状態になる。完全消滅が仏教の目的なのです。悟りを開いた釈迦が、そのような生き方をしようとした時、天から梵天が降りてくるのです。お釈迦さまの前で手をあわせて「それでは困ります。あなたが悟りの道を抱え込んで死んでいったら、その悟りの道を誰も聞くことができません。どうぞ、みなさんにそれを説き広めてください」といって布教をすすめるわけでありました。それで釈迦は、しづしづ自分の悟りの道を人々に説き広めるために立ち上がった。そして残りの45年間、布教活動に身を捧げた後、涅槃に入って消滅する。このエピソードで降りてくるのは梵天でないのだめなのです。他の、三流の神さまが降りてきたのではだめで、バラモン教の最高神が降りてくる場所に、この話の眼目がある。「梵天では救えないものを仏陀が救う」という話が、この裏に設定されているわけでありました。「一切皆苦」というのは外部の何者にも頼ることができない状態で我々は苦しむ続けねばならないということです。そして、この世が苦しみであることの大きな原因は「諸行が無常である」ということ、刹那ごとに、一瞬のうちに我々の世界が消滅していくということです。我々が本能的に持つ願望は「生き続けたい、もち続けたい、今の状態を保持したいという思い」。これが「諸行無常」の原理によって全部否定されるわけです。

「諸法無我」。私はここに存在するに違いない。私だけは絶対に間違いのない存在の根拠である。他のものはいくら頼りなくても「私」というものは絶対にここにはいるではないかという自覚が、全部、錯誤であることが「諸法無我」であります。

このように苦しみの世の中。そこからの離脱を目指すのが「涅槃寂静」、これが仏教の目的なのであります。

さてそこから倫理観の話に入りますが、まず釈迦は、こう考えました。我々が「一切皆苦」の世界から離脱して涅槃に入る道は「仏道」という道しかない。だから、この世界からの離脱を望む者は私が説く道を追体験せよ。私はすべての自分の体験を弟子に教えるから、一つ残らず隠し事なく教えるから私についてきたい人は皆、ついてきなさい、と言って布教活動をします。もちろん釈迦の教えを聞く人もいれば、全然、聞かない人もいます。わからない人は「一切皆苦」がわかってない人です。「世の中には楽しいこともある」と思っている人は来ないわけで、一方、「一切皆苦」だと思っている人、心が閉塞状態の中で苦しんでいる人は釈迦のところに来てくる。それを釈迦は全部、丸抱えにして引き受ける、釈迦をリーダーとして、釈迦の教えの追体験をするグループができる。これを仏教では「サンガ」という、仏教僧団ですね。サンガの人たちはすべて生産性を放棄しなければなりません。仕事なんかしているようでは本当の離脱

を望む人間のあり方は完成しません。すべての生産活動を捨て、それ一筋にすべての人生を自分の「悟り」という目標にかけなければ、この目標は達成できないと考えましたので、釈迦は自分の弟子たちに「生産するな。生産活動に携わってはならない」と義務づけました。したがって釈迦の周りに集まった人たちは全員、無職であります。家族制度の中で誰かを養うとか、社会活動するとか、そういう世俗の人間関係を捨てて生まれと言ったので全員が自分の家を出てきたのであります。全員が住所不定・無職なわけです。伝説では1250人いたらしいので1250人の住所不定・無職の集団を抱えた釈迦が、そこにいるわけであります。

そして弟子は釈迦にこう言う。「お釈迦さま、あなたの教えにしたがって私たちは生きていきたいと願ってここに集まりました。どうぞ仏道を教えてください。ただ、一つ問題があります。無職の私たちはどうやってご飯を食べていったらいいのですか?」。生産性がない人たちが集まったのでご飯を食べる方法がない。ここが釈迦と麻原彰晃が同じように背負った課題があります。生産活動をやめた弟子たちが1000人単位で集まってきた時、その弟子たちをどうやって食べさせるのが集団のリーダーの腕の見せ所なのでありますが、その時、釈迦はこう言ったのであります。「この組織を最も長く維持するための方法として社会からの恩恵で生きよ。ただし社会にそれを強要してはならない」。強要することによって社会との間に波風が立ちますから、結局、その組織のサステナビリティを減少させることになる。「社会との間に一切の波風を立てない、軋轢を起こさない形で社会からの恩恵を受けよ」と言いました。その具体的な方法として採用したのが「布施」であります。世間さまに強要せずに生きていくための生き方であります。四つあります。一つ、「ご飯は托鉢でもらえ」。托鉢は回ってみるとわかりますが、声を出さずに回る。日本の禅宗では「オーイ」と声を出しますが、本来托鉢では声を出しません。静かに家から家を回ります。もちろん気がついて何もなく家だっただくさんある。そういう時には次の家に回る。一切、強要することなしに、残り物や余りものをもらって暮らす。これが托鉢です。二つ目は衣です。生産しませんからどこにも衣を買うお金はないわけで、衣は道端に落ちている雑巾の切れ端を集めてきて、自分でつないで糞虫のお化けのような格好をして着る。「汚い衣」というのをインド語では「カシャーヤ」という。そのカシャーヤが音写されて袈裟になります。

次に住まい。生産しないので家などあるわけがない。本来的に住む場所は木の下か洞窟。「自然の中で雨風が凌げるところで暮らせ」。そして薬です。自然にある薬用物ということでインドでは牛のおしっこ。牛はすべてきれいなものとなっていますから、牛のおしっこを飲み、薬に使い、塗り薬にも使う。これが僧侶の基本的な生き方であります。ただし条件がついていて、信者さんがそれ以上、もっとよいものをくださった場合は、ありがたく受け取れと言います。受け取

ることによって修行が、よりスムーズにできればいい。ここに仏教独自の「善」の概念が現れてくるわけです。

仏教修行者にとって「善」とは何か、それは修行が進むことであります。修行の進展に役立つことが善であり、修行の阻害要因になるものは「悪」であるという、ここに修行者の世界だけの「善悪観」が現れてくる。さて、こうして支えられる側としての修行集団、サンガが登場し、それを支える側の一般信者の世界が設定されるのですが、その一般信者の人たちはどんな気持ちで布施をするのか。彼らは布施することによって輪廻から解脱したいと考えているわけではありません。輪廻から解脱したいのであるならば、その人は出家しなければならない。一般の人たちはお坊さんにならずに、それでもお坊さんに布施をする。この目的は解脱ではない。世俗の中での善行です。その当時は、仏教とは別の、一般のインド人の通念としての「善悪観」がありました。それは「業」に基く善悪観です。「業」の基本は「善因楽果・悪因苦果」であります。善なる行為を行なうと、その結果、楽がくる。悪を行うと苦しみが来る。

在家の人たちの考え方は原則としてこの業の世界の中での幸せを求めるわけです。そして、業の世界の中で、よい結果をもたらしたいと願う人たちにとって一番やりやすい善行は布施です。自分もっているものを他者に与える行為は善行です。一般の人々はお坊さまに布施することによって布施の果報として将来の自分の楽を求めるわけです。

この前、私の2番目の息子が「タイで結婚したい」と言い出しまして、奥さんはタイ人ではないのですが、タイで結婚式をやりたいと。家族全員集まってタイで結婚式をした最初、朝7時にバスがやってきてそのバスからお坊さんが9人降りてくる。結婚式にはお坊さんを9人呼ぶと決まっている。そして結婚式場に9人並んだお坊さんに最初にご飯を出す。新郎と新婦がご飯をつぎます。するとお坊さんはご飯を食べて、さっさと帰ってしまいます。お坊さんの仕事は、布施としてのご飯を食べることなのです。これを「福田思想」という。布施をする時には布施の対象が立派であるほどリターンが大きいというのが福田思想です。お坊さんは福田ですから、布施をする時に一番効率のいい触媒です。来てくれないと困る。しかし男女が結びつく結婚式の場にいてもらうわけにはいかない。だからご飯だけ食べて帰ってもらうわけです。同じことがお葬式でも病院でも、一般の人々が自分に福があって「いいことがありますように」と願う場所には必ずお坊さんが顔を出すわけです。

ただみんながみんな将来金持ちになるとか、健康になるとか、そういったことばかり願っているわけではない。在家者の中には「私も悟りを開いて涅槃に入りたい」という人もいる。家のしがらみがあって「今は出家したいが、できない」という人たちもいる。そういう人たちはどう思うか。

今ここにあるお布施の力によって「将来、出家できる場所に生まれますように」と出家への間接的な願いを込めて布施をします。そういう人たちが混ざった形でお坊さんの出家世界を支えるという「二重構造」になっているわけでありませぬ。

一般の世俗の社会の中で「善」だといわれているものが、出家者の世界では「善」にならないことが起こってくる。それは何か。「輪廻」に益してしまうもの、「輪廻」に資するものは世俗の中では「善」だといわれていても、出家の世界から見れば「悪」だということになるのです。世俗で「悪」だといわれているものは出家世界でも「悪」です。殺すとか盗むとかウソをつくとか。しかしながら善に関しては、世俗の中で善だといわれているものでも、将来の輪廻を引き起こすような善であるならば、お坊さんの出家の立場から見れば、それは善ではないことになるわけですね。たとえばボランティアに行く。人助けする。これは世俗での善ですが、僧侶はボランティアに行きません。いっては何りませぬ。そういう人助けをしてはいけません。なぜならその果報が戻ってきてしまうから。どこかいいところに生まれてしまうから。輪廻を止めるという究極の仏教の立場からいうと、これは「悪行」ということになる。仏教の僧侶は極めて世俗的な意味からみると善から遠い、もっというと冷たい人間に見えるところがあります。

僧侶は一切の善行を禁止されているのかというところ、そういうわけではない。何が問題なのかというところ、「善行を行なっている」という意識であります。「私は今、善なる行を積むための意識をもって善行を行なう」と。それが善行になります。僧侶が世俗的な善行を行なうこともありうるが、その時に求められるのは「自分が今、善行を行なっているという自覚をもたないこと」です。なかなか難しいけれど、そういう心でやれというのです。ここに「仏教の善の二重構造」が現れてくる。しかしながら、今申し上げているのはお釈迦さまの時代、阿含経に基づく古い時代の仏教です。これが大乘仏教になりますと、この善悪構造にズレが生じてきます。世俗の善行は本来ならば、そのまま世俗の幸せにつながるだけです。悟りとは一切関係しないといわれていたその世俗の善行も「特別な智慧の力を使うことによって悟りの方向に向けることができる」という新しいアイデアが出てくるわけですね。こうなると日常的な善行を行なっている、それが悟りへの一歩になっているという新しい考えの修行構造が登場してくる。これによって出家をしていない人たちにも「悟りへの道」が開かれるという、極めて広い悟りへの門戸が開かれることになり、大いに在家の信者たちを取り込んでいきました。このような世俗の善行の方向を転換して、世俗の幸せに使うのではなく、それが悟りに使われる方向に変わっていく。「業」の原因と結果が変わる。この変わるという言葉は仏教用語では「回向」と申します。方向転換です。

方向転換ができる人間にとっては、日常的な活動が、そのまま悟りの道へ広がる。それがで

きない人とどこが違うのかというと、方向転換をできることを知るための智慧があるか、ないかで  
す。その智慧のことを「般若波羅蜜多」という。般若波羅蜜多という智慧がある人は方向転換で  
きるので、釈迦が言ったような厳しい世界ではなくても、悟りは開かれていくことになる。その場  
合、どんな日常的な行為を行なうと、それが方向転換によって悟りの方向にいくのか。最初期  
は世俗の良い行い、方向転換可能なものの代表は「利他」であると考えられていました。自分  
と同類の者たちに救いの手を差し伸べるボランティア行為、人を助ける行為です。本来ならば  
悟りに結びつかなかったものが、方向転換によって悟りと結びつくようになると、仏教の初期の  
段階ではその「利他」が勧められていたのですが、やがて善行のインスタント化が次第に進む  
ようになって、人を助けるという、実際に活動しなければならない行為よりも、もっとインスタ  
ントな善行はないかということで、やがてとって代わる形で次第に有力になっていくのが「崇拝する」  
という行為であります。何を崇拝するのか。たとえば仏陀の遺骨を崇拝する。経典を書写する。  
経典を読むという崇拝行為が善行だと考えられる時代がきました。極めて極端に進んだ形が  
「念仏」や、「題目」です。回向する行為が「利他」から、より簡略な善行へと進んでいくパターン  
です。大乘仏教の経そのものの中に「経典を書写せよ。この経典を唱えよ。それは何者にも勝  
る」と書いてある。やがて「経典崇拝」が大乘仏教の中では善行のチャンピオンになっていき、  
そして今の仏教のさまざまな様相を生み出してきたのです。大乘仏教の流れを語る事が今日  
の目的ではありませんが、仏教の倫理観が二重構造でできていることを知っておいていただ  
きたいと思います。

次に、仏教の組織論についてお話します。悟りという人間個人の向上に関する話から、も  
う一つ別の、仏教で欠くことのできない社会とのかかわりにおける善悪観に「サンガ」の活動が  
あります。一人ひとりが仏道修行の中で業を消すための仏道修行をし、心がけをよくして生き  
ていかなければならないという、修行者としての規範を仏教では、「戒」と申します。「戒」は一  
人ひとりの人間が自己向上のために守るべき規律規範です。「戒」は数が少ない。「五戒」とか  
「十戒」とか。心だけの規範ですから大枠で囲めばいい。「殺すな、盗むな、ウソをつくな」程度  
の具体性で十分です。しかもこの「戒」には一切、罰則はありません。心がけだから。その人の  
向上するペースが落ちるとい、自分に対する害はありますが、外の人にとっては何の関係もな  
い。ですから、「戒」に関しては破っても社会的に何の問題もありません。これに対して仏教サ  
ンガという組織の問題を考えると違う話が出てきます。

修行の場である一つひとつのサンガが維持されていくことは、仏教にとって絶対に必要なこ  
とです。仏教の定義は「仏・僧・法」ですから、仏教は必ず、サンガという組織がなければ成り立

たない宗教です。そのサンガが成り立つためにはサンガを支えてもらわないといけない。社会に依存しながら暮らす状態が維持されなければならない。しかも人からご飯がもらえなくなった段階で仏教は滅びる。人からご飯をもらう時に「ご飯ください」というのはいけない。無言で社会からの好意を待つ形でサンガが運営される。サンガが維持されていかなければいけない。その場合、もらう側とあげる側が、どっちが強いのか。あげる側が強いに決まっています。布施はあげる側が絶対的に強いのです。したがって、仏教サンガは社会との軋轢が生じる事を行なうてはいけない。したがって仏教サンガのメンバーには厳しい生活の規律が要求される。その眼目は「世間さまから後ろ指を指されない」ということです。しかし1000人のお坊さんに朝、訓示をして「今日も1日、社会の人々に迷惑をかけずに正しく生きていきましょう」といっても意味はない。1000人の人たちは生まれも育ちもばらばらな人たちが集まってきている。価値観が皆、違う。ある人にとっては行儀のいい行為でも他の人からみると行儀が悪いことになる。それぞれの生活の状況が違う人たちが集まってきていますから漠然とした言葉で「行儀よくしましょう」といっても意味がない。そこで日常の一挙手一投足を統率する具体的で詳細な生活規律が必要になる。その目的は「戒」とは関係ない、その人が立派になるための規則ではありません。サンガが、社会から後ろ指を指さされないようにするための最低ラインを決めていくものです。その規則が膨れていって200、300近くになる。細かいものを集めると600近くある。それを全部まとめた本を「律」と呼びます。戒と律、あわせて「戒律」です。キリスト教、イスラム教の世界でも「戒律」という言葉を使いますが、この言葉は、よくよく気をつけて使わないといけない。イスラム教やキリスト教で意味する「戒律」という言葉は「戒」です。「律」ではない。イスラム教にはサンガ集団はないでしょう。出家者集団はない。本来なら仏教以外の宗教の規律を指す場合には「戒」という言葉しか使うべきではなく、「戒律」と言ってしまうと、出家集団がそこにあることを意味してしまいます。

「戒」と「律」は似てはいますが、本質は全然違う。「律」の特徴は罰則があることです。「律」の目的は個人の向上ではなく、サンガの維持です。サンガという組織を維持するための法体系が「律」ですから、法律と同じで、法体系をおかすということは、その組織に害を与え、組織を危険にさらすことです。ですから組織から罰則が与えられます。「律」の規則には全部、サンガが主体となった罰が与えられることとなります。酒を飲む行為は「戒」でも禁止され、「律」でも禁止される。酒を飲むことは「修行」という個人の資質向上の妨げになりますから、戒として禁じられる。一方、「律」の中にも「酒を飲むな」と書かれている。修行者が酒を飲む姿を社会の人々に見られると強く非難されることになる。「律」は常に社会からその組織がどう見られているかが判断基



準となって設定されている。そこが基本的に違うのです。

「律」の中にこんな規則があります。「僧侶は植物を伐ってはならない」。木が生き物だから、衆生だから有情だから殺生になると考えるかもしれませんが、そうではありません。仏教は本来、植物には命があるとは考えていません。仏教は植物を有情の中を含めません。我々は輪廻しても植物になることは絶対ないのです。では仏教の「律」の中で植物を伐ってはいけないというのはおかしいじゃないかと思われるでしょう。そこには次のような因縁があります。仏教ではない、他の宗教では植物に命があると考えた宗教もある。典型的なのはジャイナ教です。植物は生きていて考える。ジャイナ教の僧侶は植物を大切にしている。その横で仏教の僧侶が平気で木を伐っているのを見たら世間の人はどう思うか。「ああ、ジャイナは立派で仏教は墮落しているなあ」。そう思われてはいけないので原理的には植物を伐ることに問題ないが、世間からいわれた時に仏教が非難的になるのを避けるために「木を伐るな」と決まったのです。

出家してお坊さんになれない人がいます。身体障害者や重病人は僧侶になれません。なぜそういう人たちがお坊さんになれないのかというと、当時のインドにおいてはハンセン病の患者とか身体障害のある人は社会から差別され、食べていくことのできない立場におかれていました。そういう人たちをサンガが僧侶として受け入れると、どう思われるか。「サンガは修行者の集まりだというのは口ばかりで、本当は食うに困った連中が托鉢でご飯をもらえるというので集まっている吹き溜まりだ」という印象になる。そういう人たちをサンガに入れることによって仏教全体の評価が下がり、お布施の道が絶たれて壊滅する危機がある。だから入れないわけです。もちろん今は逆で、そんなことをいったら仏教も潰れますが、仏教の律を守っている世界では今でも、そういうのです。例えば東南アジアは「律」を守っていますが、律の中には「身体障害者は僧侶になれない」と書いてある。それをどの程度だと考えるかは分かりませんが、それを守っている僧団はありますから、「律」の規則を厳密に、時代を超えて守っていくことには大きな危険性があることも注意して理解していただきたいと思います。

「戒」と「律」という二つの生活規範を重ねて両方を僧侶は守る。在家の人たちに対しては「戒」だけ。在家の人たちはサンガという組織に属しませんから「戒」だけでいい。その人たちが次の段階で僧侶になって出家した時、どうなるか。「戒」を守りながら上乘せで「律」も守ることになる。今の私たちと同じで道徳を守りながら法律を守っているのと似ています。「二重構造」の仏教が出家者の世界に現れてくる。日本の場合、仏教が導入された奈良時代から、すでに仏教は「律」を、あえて放棄させられてしまいました。日本の仏教では「律」を守って暮らしているサンガは存在しません。ということは二重構造の「律」がない出家者がいる。日本の出家者は

「戒」だけで生きている。他の仏教国とは異色の仏教が存在しているわけです。そのことを理解していないお坊さんたちが、日本にはたくさんいて、タイやミャンマーへツアーで行って、バスの中で缶ビール飲み始めるわけですよ。全然、悪いことだと思っていない。「律」という別個の規則があることを知らずにいくもんだから、ビールを飲むことに抵抗がない。それを運転手やガイドさんが見るとびっくりするわけです、犯罪行為ですからね。日本から犯罪行為をやっている集団がきたということで、それがSNSで広がってえらいことになる。学生にも「向こうにいつてやっちはいけないことがいっぱいあるから、ちゃんと勉強していつてくれ」と教えています。

以上で仏教の倫理観の基本構造の話を終りまして、「ネットカルマ」の話をしたと思います。先ほど仏教には「業の思想」があると申しました。「善因楽果・悪因苦果」。この業には大枠、原則があります。一つ。我々の倫理的行為は絶対に消えることなく、記録されている。記録され、業のパワーとして残ります。たとえ数十億年、数百億年たっても行なった行為の結果は必ずや戻ってくるのであると仏教では言われていますから「業」は我々の倫理的行為を一つも残さず、見逃すことなく、記録しているシステムなのです。もう一つはその「業」の報い。どんな結果がくるか、いつくるかは全く未知であります。不可知であります。今かもしれない、死んだ後かもしれない、100回死んだ後になって、今行なった行為の結果として地獄に落ちるかもしれない。インターバルの長さは全く未知であるのが「業」の基本原理です。もう一つ、どんな形で結果がくるか分からないのも、「業」の基本です。「人を殺したので私も殺されました」という単純な因果則ではありません。「人を殺す」という行為と「地獄に墜ちる」という行為は全然、類似性がない。業の因果則の規則は自分にどんな報いがくるかは予め予測できないのです。このような「業」を今の日本人に「信じろ」といつても誰も信じません。みなさん「輪廻」を信じていますか？「輪廻」を信じてない証拠は、お墓をつくることです。「輪廻」を信じていたらお墓なんかつくるはずがない。次、どこかに生まれて行くわけだから。それなのに火葬して残した骨を骨壺に入れて墓を立てる。お墓をつくる人たちは「輪廻」を信じていないわけです。日本人は、みんな「輪廻」を信じていない。私も信じてない。

私は釈迦を信じていますが、「輪廻」も「業」も信じていません。そんなものは嘘だと思っています。けれども嘘だと思っていた「業」が今、蘇りつつあります。それは、インターネットによる「業」と同じシステムの出現です。我々の行なっている行為がすべて記録されていくという「業」の原則をネットに当てはめてみますと、今は過渡期ですが、我々の日常の一挙手一投足がすべて監視され、ネットの情報としてビッグデータの中に入っていき時代がきています。分かりやすいのはドライブレコーダーです。その発達によって互いの車を監視しあうことになり、道路上

で行なっている我々の行為が全部、残るようになりました。今は道路上で済みますが、ドライブレコーダーはどんどん縮小されてミニサイズになって、間違いなく、ボタンやメガネにつくようになる。人間が互いにドライブレコーダーをもっていて、すべてが監視され、声も映像も全部その瞬間にネットに上がっていくようになる。ここにいる人たちの全部の情報が残る。「人と人が顔をあわせている対面だからそうなるのであって、ひとりぼっちの時なら大丈夫だろう」と思うと大間違い。IoTが発達し、すべての電子機器が我々を監視し、それに応じてさまざまな反応を起こす装置が今、どんどん発達しています。冷蔵庫にIoTがつくと冷蔵庫の中のIoTの機械が中にどんな食品があるか監視する。私の中からレタスとハムとトマトを取り出すと冷蔵庫が自動的に店に注文してレタスとハムとトマトを補充してくれる。そして、私はこの3種類が好きだと認識しますから、それに類した食品もどんどん買ってくれるようになる。冷蔵庫が私の味覚の嗜好から日常の行為まで全部、把握するようになる。冷蔵庫、洗濯機、自動車、マイクまであらゆる電子機器がIoTになりますから、人がいようがいまいが、日常生活のすべてが監視され、何をしているかがわかる時代がくるのです。しかもその情報の一つひとつにタグがついています。タグで個人を特定することができる。顔認識もできる。この前、中国にいきましたら中国は至るところに顔貌認識のカメラがある。ウイグル族は全員、顔認証が終わったそうです。ウイグル族は今後、政治活動をするのが難しくなります。どこの誰が何をしたかを全部把握されている。今、中国は全中国人にまで拡大しようとしています。もちろん日本もやるでしょう。それをやると犯罪発生率が下がりますから。そんな時代が間違いなくきます。その段階では怖くも何ともない。なぜならその情報は断片だから。しかしその情報にタグがついていますのでタグごとに集めると個人のやったことが一連の流れとして現れてきます。「佐々木」というタグのついた情報を全部集めると私がやったことが出てくるわけです。それがネットに乗りますから世界中に配信される。それでどうなるか。炎上してクビになるかもしれないし、とんでもない悪い評判になって道を歩けなくなるかもしれないということです。しかもこの操作は釈迦の時より怖いのです。釈迦が考えた「業」というのはメカニカルなシステムなので、そこには人間の邪悪さは含まれてこない。やったことがそのまま結果として現れてくる。公平で公正です。ところがネットではその情報を操作するのは人間ですから人間の邪悪な心が混ざってきます。その人の悪い面だけを集めて「私」というものを構成することもできる。「私」というものが「こういう悪い人間である」と扱われることになる。すでに私たちはそういうものをいっぱい見えています。アイスクリームのケースの中に入って遊んでいる店員の顔が出てきて日本中に配信され、「とんでもない奴だ」と名前から全部明かされて炎上して批判されるけど、考えてみたらあんなの、子どものいたずらですよ。みな、

やりますよ。狭いところに入るのは子どもの癖だ。ましてアイスクリームだったら面白くて仕方がないに決まっています。昔なら子どものいたずらで親が叱って、先生が叱って「なんていうことをするの」と怒って「バケツもって立っとれ」で終わった。それを糧にして、その子は大人へと成長していったはずですが、ネットになりますと、それがその人の全人格として配信され、「その人はそういう人なのである」と決定づけられて広がっていく。あの若い店員がどうしているか知りませんが、明日は我が身ですよ。我々の将来の姿であります。これが「ネットカルマ」の原則です。

釈迦の時代は親の因果は子に報わない。「業」は、やった本人にその結果が報われる。親がやった因果が子に向かうことはない。ところがネットの「業」では、それがありません。なぜなら情報が消えないから。報いがきた後も、その情報はネットに残ったまま。親がやった行為、じいさん、ひいひいじいさんがやった行為が自分に振りかかってくることもある。就職しようと思っていたら名前が調べられた。「あなたのひいひいおじいさんは昔、盗撮したんですね」といわれる。「あなた、そういう家庭ですか？」といわれる。親の因果が子に報う「業」であります。もう一つ、ネットの「業」は結果が繰り返します。報いがきて、みな忘れても10年たって、また同じような事件を誰かがやった時、リンクが張ってあるから同じような事件を調べたら「昔、これと同じことをやった人もいたんだね」と名前が出てくる。「それって君じゃないの？」という話になり、繰り返し、その結果はきます。実際、いろんなところでニュースでネットの中で批判されている人たちがたくさんおられると思います。そういう人たちの気持ちはお釈迦さん時代に「業」の閉塞感の中で、どうにもならなかった、逃げ道がなくなった人たちと考え方も近いものではなかったかと思っております。

そういう人たちをこれからどうやって救うことができるかはまだ誰も考えていないし、方策の手掛かりさえ掴んでいませんが、しかしながら同じ閉塞感で生きていたのが釈迦の時代のインド人であると考えた場合、釈迦が残した教えに、新たな「ネットカルマ」から逃げ出す、まさに「輪廻」から解脱するように「ネットカルマ」から解脱する道筋が、ありうるかもしれないというのが、私の提言であります。

時間がきましたのでこれで終わります。ご清聴ありがとうございました。